
ケータイ恋愛小説「先生、ぶっ殺す！」

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケータイ恋愛小説「先生、ぶっ殺す！」

【Nコード】

N0527M

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

「悪夢のiらんど」投稿作品。オレがケータイ恋愛小説を書くとうなるだろう、という実験。10枚。児童ポルノ禁止法に違反してるのかしてないのか、ひとまず、はじまりはじまり。

「やったあ！」

どしどしいいいいいん。

完全に珍太郎は落とし穴にはまり、見事捕獲に成功した。

珍太郎は穴の中から「殺してやる！」「ちきしょう！」とわめいている。ざまあ見ろ。

ロリ華は日ごろのうっぷんを晴らすために、穴の上から、放尿した。

しょんべんを浴びる珍太郎。

「ああん。もつと。もつとかけて」

なにいいいいいいい。

こいつ、こんなに変態だったのか。

ロリ華はむかつて、じゃあこれでどうだ、とうんこをぶりぶりした。

「ああん。最高！もつともつと！」

うんこまみれになり珍太郎は興奮してる。

誤算だ。こういう大人もいるのだ。

ロリ華はお尻をふいてスカートをはいた後、どうしようと悩んだ。まあこうなったらほかっておいて餓死させてやることにした。

学校では珍先生は行方不明ということになった。本当はみんな落とし穴に知っていることを知っていたのだが、珍先生がロリコンであることも知っていたのでいなくなった方がいと考えそういうことにしておいたのだ。

珍太郎は何も飯が食えず、うんこやしっこを流し、落とし穴の中は臭くなっていた。

一ヶ月くらして、ロリ華が忘れた頃に落とし穴を見に行ったら。

「ま、まだ生きてる！！！」

メタボリックの脂肪の貯金をなめていた。一ヶ月ももつんだ。

「うう。何ということなの」

しかも、しかも、ガリガリにやせた珍太郎はなかなかイケ面だったのだ。

「うう。珍先生てやせるとあんなにかっこいいんだ」

ロリ華はちよっときゅんときてしまった。

しかも、珍太郎は弱まっただけで性格も少し穏やかになっている。

「ロリ華さん。許してください。先生が悪かったです」

ロリ華はイケ面に泣きながらそんなことを言われたので、きゅんきゅんきゅーんとなってしまい、仕方なしに、みんなの協力を得て、珍太郎を落とし穴から引き上げた。

そんなわけで、珍太郎とロリ華はつきあうことになった。仕方ない。ロリ華は面食いなのだ。

ロリ華は珍太郎に手料理を毎日作ってあげた。ロリ華はすごく料理が上手い。

しかし、それが失敗だった。珍太郎は一ヶ月で元のでぶに戻ってしまった。

「もう別れる」

「そんなあ」

また珍太郎はロリ華の下着を盗んだり、ゴミ袋を漁るようになった。

ロリ華は、これはもうカンベンならんと思い、警察がだめなら内閣総理大臣に直訴しようと思った。

ぷるるるるるるるるるる。

「はい。もしもし。内閣総理大臣ですけど、何か用？」

「あの。あのですね。あたし、中学の先生にしつこくつきまとわれていて大変なんです」

「ははは人気」

「こら！」

「ひっ」

「人気者ですまそうとすんな。お前、一国の首相やろ！」

「ふえええん。あんまり怖く言わないでよう」

「ご、ごめん」

「わかりました。それでは、かわいい中学生をあなたの学校に送り

ましょう。そうすればもうあなたなんかに見向きもしくくなりますよ」

「は、はあ」

なんだか根本的におかしい感じがするが、まあいい。つきまとわれるよりましだ。

翌日、ロリ華のクラスにむちゃくちゃかわいい子が転校してきた。

「エロ子です。よろしく。うふん」

エロ子はやらしい感じで珍太郎にウィンクした。

珍太郎の目はすでにハートになってる。なに。このイラっとする感じは。

それからロリ華は本当にイライラしていた。学校で珍太郎とエロ子が腕を組んで歩いていたり、給食の時間、エロ子が箸で料理をつまんで「あーんして。あーん」「あーん」てな感じで珍太郎に食べさせてあげてるのだ。

まわりの生徒はやれやれという感じだ。

ロリ華は何が何だかよくわからないが、面白くない。イライラする。

ロリ華は、また落とし穴を掘って、上にパンツを乗せた。

珍太郎がすごいスピードで走ってくる。めっちゃ目がいい！

どしどしいいいいいん。

見事捕獲！こいつは学習能力がまるでない！

ロリ華は、漁師に手伝ってもらい、網で珍太郎を引き上げた。そして、船に乗せ、家までつれていった。

完全に監禁！ついにロリ華は犯罪者になってしまった。

部屋の片隅でぶるぶる震える珍太郎。

「ロリ華あ。何すんだよう。オレ、エロ子の家に行かないと」

「エロ子エロ子！うるせえ！お前、わしのこと好きだったんちゃうんかい！」

なぜ関西弁？？？？

「だって、エロ子の方がロリ華よりかわいいもの」

「むきーーーーー!!!!!!」

ロリ華は完全にキレた。

珍太郎に飛び掛った。

「ひっ」

そして、珍太郎の唇を奪った。

でーーーーーん。

「珍太郎、ロリ華、アウト」

窓から警察が数人どたと侵入してきた。

「珍太郎。児童淫行禁止法違反により逮捕します」

手錠をかけられた。

「ロリ華。児童売春禁止法違反により逮捕します」

手錠をかけられた。

「ふええええん。珍せんせえ」

「ロリ華ああ」

二人はパトカーに乗せられた。

こうして二人の同棲生活が始まった（刑務所の中だけ）

看守が、朝ごはんを持ってくる。大した料理じゃない。魚の骨とかイモのしっぽとかそんなばかりだ。

でも、二人はにこにこしてる。二人で食事できるのが楽しくて楽しくてしょうがない。

「ああ。こんな幸せな日々がずっと続くといいのにな」

「だめだよ。やっぱロリ華はまだ若いんだからきちんと学校に行かないと。オレも早く刑務所から出て会社勤めしないとな」

「大変よねえ。生きるのって」

珍太郎は、鉄格子を開けてもらい、「いってきまーす」と仕事に出た。懲役なのでもちろん報酬はない。珍太郎の与えられた仕事は、テロや麻薬販売など犯罪を犯して刑務所にぶち込まれた子どもたちに勉強を教えることだ。

「いつてらしやーい」

ロリ華は珍太郎のほったにチューをする。ほったならいいよ
うだ。

「あーあ。あたしも仕事に行かなくちゃ」

ロリ華は中学生なのでまだまともな仕事ができない。ロリ華に割り
当てられた仕事は、刑務所の囚人や看守にサービスをする仕事だ。
どんな仕事か。

要するに、個室に入り、愚痴をいろいろ聞いてあげるのだ。しか
も、なぜか水着姿である。まるで、エッチな店みたいだ。どうにも、
この刑務所の中では常識は通用しないらしい。これも罰だというの
だ。

「わし、女房が70なんだよ。わし今75だから。これからどうな
るんかのう」

「大丈夫よ。奥さん、90まで生きるわ」

愚痴を聞くのはなかなか大変だ。自分の意見を言わないとつま
らないし、かといえ、言い過ぎるとお客様を不愉快にさせてしまう。
ある、くたびれた看守。

「オレ、もうこんな仕事やだよう。社会の落ちこぼれを怒鳴ったり
すんのめんどくさい。疲れるよう」

「大変ねえ。大変ねえ」

それが仕事だからしょうがねえだろ！

と叫びたいが、ロリ華がこうして愚痴を聞いているのも仕事だ。ロ
リ華だっておっさんたちのくたびれた愚痴など聞きたくない。仕事
だから仕方がない。だから、大変ねえと言っしかないのだ。
看守がロリ華の水着姿にむらむらしてきて、なんと、ロリ華のお
尻をうっかり触ってしまった。

「あーあ。またでーんとなるわ」
ならない。

「どういことだ！看守なら許されるのか！」
ロリ華は腹が立ってきた。

ロリ華はむかついて、看守の腕をつかみ、無理矢理自分の胸をさわらせた。

ででーーーん。

「ロリ華、アウト」

「ええっ何であたしだけ！」

個室に看守が数人どたどた入ってきて、ロリ華の腕をつかんだ。

「この不良娘め。お前は特別収容所に送る」

「ええっ何それええ」

珍太郎がそのことを知ったのは仕事から帰ってきたときだった。

「特別収容所ってどんなどこなの」

「刑務所内にあるんだけどね、極悪犯罪人が入れられるんだ。そういう過酷だよ」

ぷるるるるるるるるるる。

「あ。メール。ロリ華からだ」

読んでみると、えらいことだ。

珍先生。あたしもう死んじゃう。一日に13時間も勉強をさせるって言うのよう。問題を間違えると電気びりびりやられるし。宿題50ページも出るよう。自殺しちゃうよう。助けてえ。

「これはひどい！」

珍太郎はケータイを握り締めた。

コーラをぐいと飲み干し、ぽいと放り投げた。

「看守さん！オレ、ロリ華を助けなくちゃいけねえ！」

看守ははははと笑い。

「お前、なかなかいい目してるな。オレの若いときみたいだ」
看守は鉄格子を開いた。

「いきな。ロリ華ちゃんによろしくな」

「あ、ありがとう」

「それと、これ持ってきた」

「??????」

なんと、看守は珍太郎にライフル銃を渡した。

「強敵がわんさかいるからな。それくらい必要さ。身長五メートルある妖怪だっているんだぜ」

「ごくり」

「やめとくかい？」

「いや、オレはロリ華を助ける!!!!」

「よっしゃ。行け」

「はい！」

珍太郎はライフル銃を構え、走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0527m/>

ケータイ恋愛小説「先生、ぶっ殺す！」

2010年10月8日14時39分発行